

創世記2：18～24, ローマの信徒への手紙12：9～21
hymn 87B, ⑤40, ⑤42

私には、私の人生に欠かすことのできない人がいます。もしその人がいなかったら、今の私はありませんでした。もしその人に会わなかったら、私は牧師にはなっていませんでした。もしその人を知らなかったら、私は度量の狭いつまらない人間のままだったでしょう。

かつての私は、人見知りが激しく、そして無口でした。大学に入学してからの3か月間、同級生の誰とも話したことがありませんでした。そんな私の前に、ある日その人が現われました。授業が終わって椅子から立ち上がろうとしていた私の前に現われたその人は、左右に2人の同級生を従えていました。その人が私に言いました。「お前、牧師の息子なんやあってなあ。俺も牧師の息子なんや。ほんでこいつも牧師の息子で、こいつも牧師の息子や。俺らの学年にはお前を入れて牧師の息子が4人おるんや。まあ、同病相哀れむっちゃうやっちゃ。仲良うしょうや」。

それが彼との出会いでした。そしてそこから濃密な関係が始まりました。

同志社大学のある烏丸今出川という大きな交差点の歩道を、彼と一緒に歩いていた時のことでした。英会話の授業の教師だったパトナム先生が、向こうから自転車で全力疾走してきました。彼はその姿を見て大声で叫びました。「ヘイ、ミスターパトナム！」。パトナム先生はその声に反応してブレーキをかけました。しかし自転車は急には止まれません。止まった場所は交差点の真ん中でした。後ろから来た車がパトナム先生にクラクションを鳴らします。前から来た右折車両がパトナム先生にクラクションを浴びせます。その時信号が変わり、両側から走りだした車もパトナム先生にクラクションを鳴らします。それを見た彼は、「ヘイ、ミスターパトナム！ ゴッド プレス ユー！」と叫んで走って逃げました。取り残された私はパトナム先生と目が合っしまい、次の授業の時に怒られました。反論する英語力が私にはなかったのです、仕方ありませんでした。

ある日、彼が言いました。「お前はみんなから搾取する権力の側に立つんか。それとも小さく弱く搾取される側に立つんか。どっちやねん」。「そらあ、小さく弱い側に立ちたいと思うで」。そう答えると彼が言いました。「せやろ、それが正しい人間の生き方や。ほんならお前、巨人ファンやめい。巨人は搾取する側や。ほんで阪神が搾取される側や。お前は阪神ファンにならなあかん」。

私は、自分と同じ左利きの王選手に憧れた子ども時代以来の巨人ファンだったのですが、彼によって巨人ファンをやめることになり、巨人嫌いにさせられました。

そして彼のおかげで、搾取される側の気持ちがわかるようになりました。

河原町三条の近く、親不孝通りと呼ばれている道を歩いていた時のことです。真っ赤なポルシェがクラクションを鳴らしながら、狭い道を強引に進んできます。彼はすれちがいざまにポルシェのドアを思いっきり蹴って怒鳴りました。「無茶な運転すんなや！何様やと思てんねん」。ポルシェが止まって中から出てきたのはヤクザ様でした。すぐにヤクザの仲間も集まってきて、彼を取り囲みました。ヤクザは彼に言いました。「事務所まで来てもらうで」。彼は「おう！事務所でもどこでも行ったらあ」と言い返しました。私は近くの公衆電話に飛び込み、緊急通報のボタンを押して警察に連絡しました。すぐに警察官が来てくれて、彼は組事務所連れていかれずに済みました。ヤクザたちが立ち去ると、警察官が言いました。「通報者は誰かなあ。ちょっと手え挙げてもらえるか」。私はすぐに手を挙げました。すると警察官が私を手招きします。私は調書を取るのに1時間近くもパトカーに乗せられ、軽はずみな言動は慎むようにときつく注意されました。

パトカーが立ち去ると、彼が私の方にやってきました。命を救ったことを感謝されるのだと思っていると、彼は私の胸倉をつかんで怒鳴りました。「なんで警察なんか呼ぶねん！奴らは国家の犬やぞ。敵や、敵。敵に助けを求めてどないすんねん」。

彼はその頃、外国人登録法に反対する運動に熱心に参加していました。外国人登録法を利用して別件逮捕する警察に怒りを向けていました。外国人登録証を持っていなかっただけで逮捕され、職場を首になった友人がありました。私は彼にあやまりました。

インドに井戸掘りに行った彼は、赤痢菌をもって帰国しました。インドでは平気で井戸や川の水を飲んでいたので、彼には病気になる予感があったそうです。しかし彼はいつもどおりに大学にきました。友人たちと一緒に食事もしました。その翌日、彼の赤痢菌が潜伏期間を終え、彼は病院へ運ばれて隔離病棟に入れられました。神学部の校舎には保健所の方が来られ、消毒が行われました。前の日に、彼が残したピラフを彼が使ったスプーンで食べた友人は、血便をして大騒ぎになりました。しかしそれは赤痢がうつったわけではなく、彼の赤痢を知って自分も赤痢になったと思ひ込んだことによる症状でした。

隔離病棟を持つ病院は京都に1つしかありません。彼はその広い隔離病棟にたった1人の入院患者でした。彼から私のところへ電話がかかってきました。「なあ滝口、餃子とビール買って、お見舞いに来てくれへんか？」「なに言うとなねん。お前赤痢なんやろ。お前のところに行ったら赤痢うつるやろ。」「いや、わからんで。うつるかもしれへんし、うつらんかもしれへん。これは賭けみたいなもんや。いっちょうつらんほうにかけて、ここは餃子とビール持ってきてくれや。」「あほか、なんでそんな賭けせなあかんねん。」「お前友達やろ。友達が餃子とビールほしいいうてんねん。なんとかしたるのが友達ちゅうもんやろ。」「ちゃうわ。赤痢がうつるかもしれんから、俺のところに来たらあかんて言うのが友達ちゅうもんや。」「なあ頼むわ。ほんまのこというわ。隔離病棟な、むちゃくちゃ広いねん。そこに俺独りぼっちゃねん。看護婦さんもほとんどけえへんねん。寂しいんや。なあ、なんとかしてくれ。」「わかったわかった。ほんなら折っといたるから」。そう言って電話を切りました。

数日後、神学部では学年対抗のソフトボール大会があり、私はピッチャーをしていました。2アウトを取ったところで、守備をしている同級生たちの方を振り返りました。ふと外野の方を見ると、ジャージ姿にグローブをはめた、隔離病棟にいるはずの彼がニコニコしながらセンターを守っています。センターにいたはずの同級生は、はるか彼方に向かって走って逃げて行っています。とにかく試合は続けなければなりません。次のバッターを三振に打ち取り、チェンジになりました。私たちはベンチに戻りました。すると彼も、センターからベンチの方に走ってきます。私たちは彼が近づく分だけあとずさりをしながら、ベンチから離れました。彼はベンチの所まで来るとこちらに向かって言います。「大丈夫や。もう隔離病棟の前の庭は散歩してもええって医者から言われてんねん」。私が言いました。「お前はなにを言うとんねん。ここは隔離病棟の前の庭とちゃうやろ。ここは隔離病棟からはるか離れた京都御所やないか。なんでお前がここにおんねん」。「いやいや、ソフトボールしたいなあと思てたら、からだ勝手にジャージ着て、足勝手にここまで来させよったんや。気が付いたらセンター守とったからビックリしたわ。でももう隔離されに帰るから安心してくれ」。彼はそう言うと、ベンチに置いてあった5本のペットボトルを開けると1口ずつ飲んで言いました。「滝口、これが餃子とビールのお返しや!」。そして彼は踵を返すと、京都御所の林の中に消えて行きました。私たちは何も飲めなくなり、のどの渇きに苦しみました。

私がホモセクシャル・同性愛者について、気持ち悪いというニュアンスの反応をした時のことです。彼は言いました。「お前、なんか勘違いしてないか。お前はたまたま男よりも女を好きになる異性愛者であるだけや。それとおんなじように、たまたま同性愛者っていう奴がおってもかまへんやないか。だいたいお前は神さま信じてるんやろ。それやったら命が神さまの創造の業やって信じてるわけやろ。なんで神さまがつくったものに『ええ』とか『あかん』とか言えんねん。それとも、同性愛者や障害者は神さまの失敗作やとでも思うてんのか。ほんでお前は成功作か。あほかっ。お前が神になってるっちゃうねん。自分を基準にして、自分の範囲だけで物事を見て、『ええ』とか『あかん』とか決めつけて、なんでそない偉そうやねん。おかしいやろ。お前が神になってどないすんねん」。

私は、度量の狭いつまらない人間でした。自分が物事の基準になり、自分という範囲に受け入れがたいものは排除し、違った考えや異なった理解をしりぞけ、気に入らないものは受け付けず、人の気持ちを考えず、他者への想像力を働かせず、自己中心的な生き方をする、私はそんな人間でした。そして彼がいなかったら、そのままだったかもしれません。

英語嫌いの私に、英会話の単位を取らせてくれたのは彼でした。英会話の授業では毎回二者択一のテストがあり、英語が堪能な彼は、いつも指でサインを送ってくれました。嫌いな授業から私が逃げないように、彼は英会話の授業がある前日には毎週私の下宿に泊まって、私を大学まで引っ張って行ってくれました。おかげでパトナム先生とも仲良くなりました。

外国人登録法に反対する集会に連れ出してくれたのは彼でした。非人間的な法律が在日外国人にどれほどの傷を負わせているか、警察がどれほどひどいことをしているか、それを知らされました。

彼を通じて、在日韓国人の友人もたくさんできました。一緒に居酒屋で飲んで、最後に肩を組んで歌った「ウィ シャル オーバー カム」を忘れることができません。1番2番3番を、それぞれ日本語と韓国語と英語で歌い、皆で泣いた夜のことを忘れません。

インドに行って赤痢になったあとも、彼は何度もアジアに出かけて行きました。彼を通してアジアの現実と困難を知らされ、その加害者としての日本人である自分を考えました。

人を好きになることを教えてくれたのは彼でした。人に向ける熱い思い、障害を持つ人をさりげなく介助する姿、障害を持つ子どもたちに向けられる優しい視線、それらを何度も見せてもらいました。彼は京都で障害を持つ人々へのサービスを行う施設で働いています。ある時彼は、エレベーターをつけたいと言いました。「障害を持ってる子どもらに、もっと来てほしいねん。『無理してがんばらんでええで。お前はお前のまんまでええんやで』っていっぱい言いたいねん。せやから車椅子でも2階に上がれるエレベーターがいんねん。うちに来てるおかあさんらとな、宝くじのまとめ買いをやっとんのや。金ないからな、宝くじ当ててエレベーターつけんねん」。

私の中にある差別意識をガンガン突いてくれたのは彼でした。日雇労働者の町・釜ヶ崎には彼が連れて行ってくれました。部落差別の問題を学ぶきっかけも彼がくれました。一人ひとりの人間にはすべて固有の背景と事情があることを前提に、他者に想像力を向けることの大切さを教えてもらいました。人と関わることの楽しさや、そのやり方は、彼が私のお手本でした。

彼は響き合う人でした。アジアの人とも、在日の人とも、障害のある人とも、差別の中に生きなければならない人とも、そしてそれらの人々を支えようとする人たちとも、響き合うことのできる人でした。私もまた共鳴する関係に入れてもらいました。つらい時に彼のことを思うと慰められ、落ち込んだ時に彼のことを思い起こすと励まされる、そのように響き合う関係をつくることができました。お互いに何でも相手のことをわかっていて、言葉など不必要で、一緒にいるととてつもなく心地よく、会わなくても何の支障もない、それでいて響き合うことのできる大切な人となりました。

私は彼によって、度量の狭さを捨てることができました。何でもありだと受け入れることができるようになりました。すると新しいものが次々と見えてきました。それにどう向き合うか、響き合うためにどうしたらいいのか、自分の課題を見つける喜びを知りました。

しかし私は彼にはなれません。私は彼とは違う働きをしようと思いました。私には私なりの場所を見つけよう、そう思って私は牧師になりました。

ところが12年前に、彼は自分の働きの場所を教会にしまい、牧師となりました。日本基督教団向島伝道所として、教会としての歩みを始めたのです。

私は彼に尋ねました。「お前が毎週礼拝やってんのか。意外や」。すると彼が言いました。「礼拝ってなんや。日曜日になんも困ってない人が集まって、讚美歌うたって聖書読んで、お前みたいのが偉そうに説教して、それが礼拝か。そういう意味ではうちは礼拝なんかやってない。日曜の朝も忙しいんや。そんな礼拝やってる暇あれへん。けどな、うちでやってることは全部礼拝なんや。毎日毎日が礼拝や。重い障碍で手を合わすことがでけん人が祈ってるで。自分の面倒も十分にみれへん人が他人の心配してるで。限られてるかもしれへんけど自分にできることで、誰かの役に立ちたいって思ってるで。だから日曜日の礼拝はなしや。毎日が神さまの仕事や。日曜日の礼拝したい奴は、どっかよその教会行ったらええねん」。

旧約聖書の創世記は、紀元前5世紀にまとめられたものです。そこには当時の人々の疑問に答える形で記されているものもあります。

例えば、すでに確立していた結婚制度です。どうして男と女が結婚するのだろうかという疑問に答えたのが、「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」という言葉です。そこで人々は思ったわけです。なるほど神による人間創造の結果として結婚があるのかと。それも男から女が造られるという、男性優位・女性蔑視のユダヤ教の思想そのままに、先に造られた男に優位性を持たせ、後から造られた女に従属性をもたせています。恐れずに言うと、男のために女があるという思想をより強いものにするために、人間創造の物語が利用されたといった面があります。

当時の人々のもっと根本的な疑問は、18節の言葉にあります。「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう』」。人々は思っていたのです。どうして人は独りでは生きられないのだろうか。どうして人には人が必要なのだろうか。どうして人は人を求めるのだろうか。それは男とか女とかいう性別を越えた疑問でした。年齢とか立場を越えた必要でした。そこに神の言葉が告げるのです。「その人に合う助ける者を造ろう」「あなたに響き合う相手を与えよう」と。

ですからこの箇所を、夫婦関係とか家族関係にとどめて読んでしまってはいけません。もっと広い意味で読むべきです。人は人と響き合うべきであり、神がそのような関係を祝福されると読みたいと思うのです。

そのことをパウロはローマの信徒への手紙の中で言い表しています。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」と、響き合うことの幸いを伝えています。それはパウロの訴える教会の理想像でもあり、神を信じる者の生き方の目標でもあります。

私たちはこれを、理想像だからといってあきらめたり、目標だからと先送りする必要はありません。いつでも、今でも実現可能な現実の中に、響き合う関係を築いていきたいと思うのです。

人を批判するのではなく受け入れること、嘆くのではなく祈ること、恨むのではなく祝福すること、独りよがりではなく思いを一つにすること、苦難の中にある人に心を向けること、自己中心ではなく神中心の生き方を考えること、敵対ではなく平和を求めること、互いに尊敬し愛し合うこと、それらが「共に喜び、共に泣く」ことへとつながり、響き合う関係をつくりだしていくのです。

私たちの神は、神の方から響き合うことを求めてくださいます。「その人に合う助ける者を造ろう」「あなたに響き合う相手を与えよう」と言っているのです。そしてイエスは、自ら響き合う相手となろうとしたのです。響き合うために、飢えている人や沈黙する人、悲しみの人や苦しんでいる人、友のいない人や無気力な人に出会ったのです。

私たちはそのイエスに、神に、応えたいと思います。神に響き合う生き方がどのようなものなのかを考え、イエスに響き合う生き方をどう表していくか、そのことをいつも課題にしていきたいと願うのです。

そして私たちは、私たちのまわりに、たくさんの響き合う関係を築き上げ、そこに「共に喜び共に泣く」という分かち合いと受け入れ合いを実現したいと思います。「主に愛されたひとりとして」、イエスとの響き合いを、人に示す者になりたいと思うのです。